# ベルグソン紹介 第4回 「道徳と宗教の二源泉」が現代に残したもの



2014年1月 三水会

野口幹夫

## 目次

1、前置き	3
2、「二源泉」でベルグソンが明らかにしたこと	4
3、道徳と宗教の第1の源泉	5
4、道徳と宗教の第2の源泉	5
5、自然宗教(静的宗教)	7
6、動的宗教	8
7、閉じた社会から開いた社会への道のりと展望	10
A) 閉ざされた社会は戦争への道 破滅の道	11
B) 快楽を求める道 簡素禁欲の道	12
C) 巨大な体となった人類	13
D) 精神の科学が未知の世界を開く、	14
8、ベルグソン亡き後の世界の思想展開	14
A) 開かれた社会 カールポッパーとジョージソロス	14
B) 質素な生活にもどる	15
C) ダークマターと五次元の発見と新しい精神科学への道	16
9、エピローグ	17
10、謝辞	18

付録 原著との対応表

### 1. 前置き

「道徳と宗教の二源泉」はアンリ・ベルグソンの最後の著作であるが、彼の哲学の 集大成であり、また人類への励ましの遺言である。

これを執筆していた 1930 年頃ベルグソンはフランスのみならず世界の知的最高権威として認められ、国際連盟の国際知的協力委員会議長をつとめ、またノーベル文学賞を受賞するなど人生の頂点を極めた。やがてリウマチの発病で、すべての業務から引退し、最後の著作に専念する時間を得た時であった。

その時代、人類は民衆を巻き込む悲惨な第1次世界大戦の経験をして、始めて不戦の思想が現実の力を得て、その具体的な形を目指した国際連盟が生まれた。ベルグソンもその設立に力を与えた。しかし未熟児として生まれた国際連盟は、中心国ですら批准ができず、その目的達成に絶望感が生まれていた。

まさしくその 1930 年代の終わり 1939 年には第2次大戦が始まった。ナチスの欧州蹂躙の果、占領されたパリで、ベルグソンはユダヤ人狩りの恐怖にさらされながら、凍てつく冬ストーブを温める燃料もなく、肺炎を起して亡くなった。

ベルグソンの終生の弟子であり、友人であったジャック・シュバリエは、当時亡命 政府の文部青少年省担当大臣であったが、フィガロ紙に次のような追悼文を書いた。 この言動に対してナチスの圧力で直ちに大臣の職を解任されたのである。

「霊性の事実と、したがって霊魂の不滅、死後存続の事実をはじめて実証的な根拠の上に打ちたてたのはベルクソンだ。たしかに、一八九六年以来、ベルクソンは、『物質と記憶』の中で、身体は思惟に輪郭を与えるために役立つが、思惟を構成することはしないことを示した。人は、自己の身体によって回想するのだが、魂によって記憶する。この原理は、哲学および人文科学に決定的な革命をもたらしたものだが、当時は、醜聞と受け取られた。今日、この原理は、あまりにも普遍的に認められているため、ベルクソンはすでに開かれていた扉を開けるためにあれほどの苦労をした、と言って、しばしば人は驚く。しかし、この扉を開けたのはベルクソンなのだ。二十年たてば、『道徳と宗教の二源泉』でおこなった発見についても同じようになるだろう、とベルクソンは、好んで繰り返していたが、その発見とは、すべての経験のうちでもっ

とも高度の、もっとも肯定的なもの、神秘思想家の経験は、宇宙を継続的に創造し、宇宙を支え、われわれを愛する人格的な、あるいは、むしろ、超人格的な神の存在を、一つの事実として、あらゆる事実のうちもっとも根源的なものとして、人類に啓示するということだ。このもっとも深遠な天才に恵まれた故人は、ただ単に一大思想家、ないしは一人の偉大なフランス人であったにはとどまらず、愛に輝く魂であった。」

## 2.「二源泉」でベルグソンが明らかにしたこと

このように人類社会は当時もっとも混迷の極にあった。当時に比べれば現代は、大戦がないだけ安定に向かいつつあるようだが、しかしながら、いまだ人間は前途の見えない混迷の中にある。ベルグソンは、そのような極限の混迷の中で、それを克服する人類社会の推進力と、その方向を明らかにしたのである。単にある思想家による希望の表明といったものではなく、ここに至るまでの人類の叡智、物理学・生物学等の科学のみならず、思想・哲学・宗教にいたるあらゆる分野で人類が獲得してきた叡智の真髄を、ベルグソンは学びとった上で、彼の天才的洞察によって、人類の明るい将来を呼び寄せる行動哲学を示したのである。

ベルグソンの時代の前後には、同じように人類社会の来し方、行く末を、科学的に立証したと称した唯物史観があった。資本主義社会が金の支配の極限に達した時、支配された労働者階級はその暴虐に耐え切れず、起きるべくして起きる階級闘争の結果、すべての最終的支配を打ち破ったとき、自由な人類社会が到来する、それが歴史の必然の法則だとしたマルクス・エンゲルス・レーニンの唯物史観である。

しかしそれは唯物史観と名乗った通り、金と物のもたらす必然はあっても、人間本質の省察に欠陥があった。人間は、経済法則だけに操られる存在ではなかった。二〇世紀初頭ベルグソンもまだ生きていた時代に、その唯物史観に基づく、社会主義革命の壮大な実験がロシア革命によって開始された。人類が二度とできない血と涙の空前絶後の大実験であった。マルクス・エンゲルスの理論の魅力によって、これが人類を救う道だと世界の多くの知性は信じた。国際コミンテルン運動の宣伝と隠蔽によって、半世紀以上も人々はその失敗に気づかなかった。それは破産したのである。

同時代人であったベルグソンは、最後の「二源泉」の著書でも、その社会主義運動に一顧だにせず、まったく評価すらしなかった。彼が冷静に語ったのは、人類の目指す道は「開かれた社会へ」であると述べたのだ。むろんこんな簡単なテーゼでは言い尽くせない豊かな内容で人類の将来展望をしたのである。

社会主義国は、いみじくももっとも「閉ざされた社会」であり、確かにそれゆえに 崩壊するしかなかったのである。その結果をすべての人類が目の当たりにし、史的唯 物論が力を失って、逆にベルグソンの哲学が実証的な存在証明を得た時、彼はこの世 にはいなかった。

マルクスの史的唯物論が人間の経済的物質的発展過程を解析して打ち立てられたものであるのに対して、ベルグソンの人類哲学は、遥かなる宇宙と、そこに生まれた「いのちの進化」がついに人間に至った過程を、事実と洞察に基づいて明らかにしていったからこそ、その先が見通せたのである。

## 3. 道徳と宗教の第1の源泉

蟻や蜂は本能に従って驚くべき王国を作り上げる。人間も家族から始まる社会なくして生きていけない。人間は蟻や蜂と違って知性を得た。知性は本来自分の方を見ている。社会の中でなければ生きていけないにもかかわらず、人間はその束縛に素直に従えない。蟻や蜂であれば、もし一瞬なりとも知性が働いて「なぜ自分はこのように蜜を運ぶだけで一生過ごさねばならないのか」と自問してもすぐ本能が「せねばならぬからするのだ」と仕事に戻らせるだろう。

人間の知性はこれに煩悶する。社会の束縛に反抗するかもしれない。知性に任せたならば、個人の反抗によって、社会は疲弊し崩壊するかもしれない。社会は必要であるから存在するのであり、それに立ち向かう社会側の努力が当然生まれる。道徳や習慣、教育あるいは初期の宗教といったものは、社会の維持のために個人個人に責務を負わせるものだ。人間道徳のうち、このような社会の必要からくる束縛の道徳を、道徳の第一の源泉と言おう。いわば社会に自然に備わった原始の本能的な源泉なのだ。道徳教育によって植えつけられる責務感に従わせることによって、社会は崩壊から免れる。しかしこの第一の源泉からうまれる道徳責務は、まず家庭にはじまり、集落、そして国家まではその統一的な力が及ぶ。そのような道徳的責務は、その領域を越えれば適用されない性格のものだ。一旦戦争になれば、それまで説かれた道徳の善悪は逆転さえする。大量殺人も是認され称揚される。それは本質的に閉じた社会に通用するものだった。

## 4. 道徳と宗教の第2の源泉

道徳には第二の源泉がある。完全な道徳、国家社会の限界を一挙に超えた道徳、人類愛がそれである。この愛の魂はさらに人類にとどまらない。全宇宙へと広がるものだ。

誤解しがちなことだが、第一の源泉から生まれる道徳宗教が、範囲を拡大して行っても第二のそれには到達しない。社会を維持するための道徳が、家庭から、近隣社会へ、そして人類へと広まっていきそうに錯覚するがそうではない。国連を持つまでに至った現在の国際社会をみても、国家主義のさきには飛躍できない限界が見えている。家族愛、祖国愛は、常に除外を生み、憎悪とともに燃えるものである。

第二の源泉による開かれた道徳、すなわち人類愛を呼びかける高次の道徳の起源を 探れば、そこには一個の人間がいる。その個人の偉大な創造の情動がある。魂が感動 で揺さぶられる情動があり、それに接した人たちは、その人のことを伝えなければな らない情動に揺さぶられる。ここに生まれた波動の伝播で、我々はその人物のことを 伝え聞いている。釈迦、ソクラテス、イエスである。(わが国の身近な例では道元や親 鸞、尊徳も挙げられるだろう。)

彼らは、いのちの危険をかいくぐり、試練を受けながら、例外なくある神的達観の体験をしている。かれらの神的達観は、いのちの進化の流れ(エランヴィタール)の根源に触れてきたものなのだ。そして彼らが伝えるメッセージは、そのいのちの流れの根源からのものなのだ。それは高みから下り、彼の中に流れ込み、彼らの周囲に広げずにはいられない愛の躍動(エランダムール)を与えた。それを得た彼ら先達の人間たちの情動には霊気があり、弟子たちがその霊気を吸い込めば、その情動に従って行動することになる。その魅力に捉えられるのだ。場合によっては、その燃えカスだけが伝わることもある。しかしそこに残る埋もれ火が再び発火するのだ。追体験しようとするフォロワーたちもその神的達観を求めて努力をする。我々自身の胸底にも神的達観者が一人眠っており、目覚ませる機会をひたすら待っているかのようだ。

第一の道徳は圧迫であるが、第二のものはあこがれだ。それに接したものは、自由 になったと感じ、人をつなぎとめていた裕福や名声などへの渇望からも解放され、軽 やかな歓喜を感じる。

第一の道徳は静止、不動であり、第二の道徳は運動、それも止めようとして止めえぬ 衝動、動こうとしてやまぬ要求である。第一の道徳はたやすく法式に表現できるが、 第二の道徳は表現に困難なものだ。逆説、矛盾、問いかけにあふれている。それらは ある心的状態を起こさせることにある。 歴史に刻印を押した道徳の偉人たちは時代を超え、また国々を超えて手を差し伸べあい、相寄って神の国を形つくる。そして我々をその国に招いてくれる。そして我々の魂の奥底にはその声に答える何ものかがある。それに答えようとするとき、我々はその理想の社会へと心のうちで身を移すのである。

現実は、そのような全人類単一の社会はいつまでも来ないかもしれない。しかし種としての人類には、飛躍の種が長い間をおいて、選ばれた天才たちとして与えられた。彼らは愛の躍動に包まれて人類全体を目指して進んだ。あたかも唯一の個体からなる新しい種の創造である。人類の総体に対しては、与えられなかった飛躍を、これら個人において与えたのだ。これら魂の一つ一つが、人類の生命進化の次なる到達点を示したのである。この灼熱した魂は決して消え去らず、再び燃え上がる熱を周りに放射しているのである。

これこそ人間種を停滞から再び飛躍に導く使いだ。閉じた社会・魂から、開かれた魂・社会へ、そして新しい人間種へとの飛躍は、このような道でしかなかった。

## 5、自然宗教(静的宗教)

「宗教」と聞いた途端に、警戒感や嫌悪感を示す人が多いのに、「宗教感」といえば、「宗教」には拒否反応を示した人たちも一応敬意を払う。これはなぜだろうか。そこには人類にとって重要な意味がある。ベルグソンはその解明にこの書の大きな部分を割いた。静的宗教の冒頭をいくつか抜き書きしてみよう。

「さまざまな宗教の過去を見渡し、また相も変らぬ宗教の現状を眺めやるとき、その 光景たるや、人間知性ににとって、まことにこれにまさる不面目はない。」「宗教が不 道徳を命じ、犯罪を強制さえするのがみられる。」

「しかし、にもかかわらず宗教を持たぬ社会というものはかってあったためしがない。」

「動物には迷信も宗教心も発見されない。」

「理性を賦与された唯一の存在たるこのホモ・サピエンスこそが不合理きわまるシロ モノにすがって生きていける唯一の存在でもあるのだ。」

ベルグソンは、道徳と同じようにこの初期宗教が、知性を持ち、幻想能力を持った 人間だけが、その社会的存在を維持するために、宗教を作ったと述べる。知性を持っ た人間は、知性ゆえに自己本位の生活に突き進むだろう。社会にとって阻止しなけば 行為にでも進む。たとえば近親者への性の誘惑である。それを理屈抜きで、その行為 に、威嚇し、禁止する強い何ものかが、現れなければ社会は解体の危険にさらされる。

また死を意識するのは人間だけだ。自分も死ななければならないと知った人間は、場合によっては士気粗相し、絶望のあまり、積極的な生き方を放棄してしまうかもしれない。個人にとっても社会にとっても致命的なことだ。そこに死後のいのちを仮想することで危険が回避される。死んだ人々もともにそこにあり、ある役割を果たし続けることが期待されて、残された人々にも救いが生まれる。

死者の魂も含めて、精霊が仮想され、人格のある神々が、それに当てられるとき、 自然宗教は生まれる。

それは人々を力づけ、規律を与えるが、効果を上げるためには、神官がうまれ、繰り返えす祭典や儀式が効果を上げる。宗教は行動である。思想は伴うが、あとづけである。自己の集団に固有のものであるほど、成員を親密に結び付け、他と区別して、自らの優位性に酔う。このような自然宗教は道義的機能と国家的機能をあわせもっていたが、社会が発展するにつれて国家統一的機能が優位になっていった。

## 6、動的宗教

表題は前章の静的宗教を受けての動的宗教で簡明なようだが、予想されるような簡単な対比ではない。ベルグソン自身この章で扱うことを、同じ「宗教」という言葉を使うべきかどうかとも問うている。私もこの章を要約し紹介するうえで、ある困難を感じている。多くの人は内容を聞く前に言葉で反発してしまうかもしれないからだ。その内容はフランス語で mysticisme (ミスティシスム)であり、日本のすべての翻訳書は、字句通り神秘主義と訳しているが、私はこれは誤解を呼ぶ訳だと思う。私はこれを「神的達観」と言葉で表現した。なぜなら「主義」といえば、だれでも容易に理性だけで選択できるイデオロギーを想定するであろう。ところがここで論じられるミスティシスムとは、人類史上まれな天才が、人生を投げ出して、苦しみぬいて、ついに達した境地をさしているのである。「神的達観」と呼んだ方がベルグソンの真意に近いと考える。

これだけを前置きにして、本論に入る。

ベルグソンはここで前大作の「創造と進化ーエランビタール」を振り返って要約する。 今ではビッグバンという言葉に近いが、ベルグソンの時代は、まだ宇宙空間は動かぬ ものと考えられていた時であるが、ベルグソンは広範な生物科学的知見のもとに、独特の宇宙のビッグバンを直観した。宇宙の初めから「創造的エネルギーの大奔流」が宇宙を貫き、生命を生み出した。その時々の物質環境の制約の中で、いのちは様々な生物種を作り出した。多くの場合その大奔流は支流をつくり、支流の流れは旋回して停滞した。意識の奔流ともいえるこの創造のエネルギーは、植物となってはその意識は眠り込み、動物の中では本能の形をとった。進化の先端の一つが昆虫特に膜翅類の社会である。本能に導かれた個体はまるで自動機械のように営巣し巧みな分業社会をつくる。進化の今一つの発展の筋を追ってついに人間社会に達した。いのちの奔流たる意識は人間において知性の形態をとる。発明が無限に開花したのだ。

しかし知性は自己本位の態度をとるため、社会は崩壊の危険にさらされ、それにたいする体制防御が必要となる。前章までで述べた静止宗教や原始道徳がその役割を果たした。そのようにして、かりそめの安定した社会と安らぎを得た人間は、そこで停滞することも可能だった。事実人間が生まれてこの方、種としては長い停滞期に入っているのだ。

創造的エネルギーは、ここで停止するわけにはいかない。人間の知性も、直観的に それが終着点ではないことを悟ってしまうからである。人間種が停滞から抜ける躍動 力は、再びもとの奔流からそのエネルギー(エラン)を汲み出さねばならない。それ をなすための道具は、人間得意の知性ではない。知性は分析するが、いのちの本質を 悟ることはできない。知性が圧倒的に強くなったとはいえ、その周りに残された(す べてのいのちに直結する)直覚こそがそれをなし遂げることができる。

それが成し遂げた人間は、千年に1度かもしれないが、確かにこの世に現れた。彼は、世の人から異常と見られた。彼を引き込む奔流に身を任せたその魂は、自分を忘れ、社会からも離れる。魂は一瞬立ち止まり、よばれた方向に運ばれたいく。その時、自分と比較にならぬ大きな存在の前に立たされ、その根源力と自分との不可分性を感じる。「神的達観」に達した。その瞬間彼は歓喜にに包まれ、ひたすらに愛となる。明日の日を思い煩うことはもはやなく、一切の物欲から解放されて、普遍的ないのちと密着する喜びのみがある。

やがて不安が芽生える。その先の躍動への思いの中で孤独になる。脱我の中の神と の合一は一瞬のものであった。観照でしかなかった。すべての神的達観者がいう「こ ころの闇夜」を経験する。

やがてその魂は行動に移る。闇夜から甦った魂には、神が内で働く。広大な企図の うちに投げ込まれる。巨大なエランにおされた魂は単純となり、逞しくなり、目的の 実現に向かって突破する。彼はこの高揚を誇らず、かえってへりくだり、神の謙譲を 自ら確証する。その魂は自己にとどまることはできず、自身からあふれて社会へと動 き始める。種としての人類全体が相手となっている。しかし経験にによって得られた 確信は言葉だけでは伝えられない。やむを得ずこの神的達観者は少数の人々と相寄っ て精神的集いを作る。神的達観の情熱が薄められながらも伝わることによって、この 集いはさらにたねを撒き、やがて僧院や教団を作っていく。

この場合の宗教とは、神的達観が燃えたまま人類の魂のうちへおろしたものが、知 的冷却の作用によって、結晶したものと考えられる。少数の選ばれた人たちにはたっ ぷりと所有されていたものが、宗教を通じてわずかなりが、万人の手に渡るわけであ る。

この選ばれた人はある意味で人間以上の人であるから、本質的に稀な存在だ。しか し、彼の神的達観の言葉を聞くとき、我々の胸奥にはそれに反響するものが必ずある。 この言葉に遠くからでも接した人たちは、遅かれ早かれ、自らのこれまでの信仰を変 えていくような魅力に満ちたものだ。

このようにして大神的達観者は、自ら模範を示して生き抜くことによって、人類を根本から造り変えていく。この目的はエランの根源には元来存在していたが、停滞によって失われそうになっていた。ここに神的な人間性がついに顕在するに至って達成するのである。我々が「神」を必要としているように、「神」もまた我々を必要としている。「神」は人間を愛する存在と見ているからだ。この宇宙に生命の息吹が貫徹しているとすれば、すべての生命を愛し愛される資格を賦与された人間の出現こそ、いのちの存在理由なのだ。神的達観者がふたたび「神」を見い出したことによって、人間種は完全に自分自身にななるという一条の道を切り開いたのだ。

彼らの神的達観による、はるかなものとの合一の経験は、我々にもやがて来たる死の先の精神の行方にもある希望の示唆を与えてくれる。少なくとも我々の精神(少なくとも記憶)は肉体に対しての独立していることは、経験的に観察し確信しているわけだから。

## 7、閉じた社会から開いた社会への道のりと展望

これまでの論述で、この二つの社会の違いを明らかにしてきた。自然のままの閉じた社会が、開いた社会へと飛躍せんとする道は、歴史上に時に現れる稀有の天才の神 的達観によって、垣間見せてくれるが、その感動が薄まるや再び閉じてしまう。その 繰り返しが人類社会の姿であった。

しかしいまの地球は、人類が閉じた社会のままで永続することは、もはや許せないような危機に直面している。開かれた社会が実現できればこの危機も解決するはずだ。 しかし、ここで新しく神的達観に到達して人類を引っ張っていくような巨人が生まれるのを待つだけでは見通しは得られない。過去の巨人たちの導きは、輝きを失ってはいないが、道は遠い。

このように困難ななかでも今後の展望を描きだそうというのがこの章の結論であり、 目的である。それは飛躍でなければ到達できないし、飛躍というからには、これまで の延長で語ることもできない。予測のつかない創造の世界のことを語るのだから、こ の章もまたゆきつ戻りつの錯綜した論述になっている。筋を見失わないようにしなが ら解説したい。

#### A) 閉ざされた社会は戦争への道 破滅の道

人間はもともとごく小さな社会に合うよう造られていた。やがて戦闘態勢が備わった社会へと大きくなる。王制または寡頭制ができる。人間は、いつの時代も支配者と服従者に分かれた。この区分けは、たまたまそうなっただけで、ひっくり返ることも可能だという意味で、「同種2形発生」といえる。(膜翅類では女王と兵隊では形態も違う。)支配者はあるゆる手段を使ってその優位性を保とうとしてきた。しかし度々同じクラスの中からの反乱で覆されたりしたが、再び新たな支配者がうまれる。その形態が閉じた社会の政治体制だ。

民主主義は、それへの抗議の中から生まれた。また民主主義の思想は動的宗教の「愛」によって支えられているものであり、閉じた社会を超え出ようとするものだ。しかしそれが本当の姿で実現するためには、民主主義を支える人間が、真に他人を尊べるような理想的人間でなければならず、それが準備できない今の時代は、形骸化する。その形だけの民主主義は最大規模の「閉じた社会である国家」の政治形態に貶められる。

争いは国家間のものとなる。快適で楽しみの贅沢を脅かす外国にいだく脅威は戦いの原因となる。戦争は文明の武器であり、凄惨なものとなる。とっておきの秘密兵器をもつ交戦国の一方が、相手を一人残さず絶滅しうる日は近い。

しかしその進路に立ちはだかってくれる人々が出た。国際連盟の礎が据えた人々だ。 国家内政にまで関与する力を持つような国際連合であれば、戦争は避けられる。その 困難は全人類のうちの大きな部分がその決意をもてれば、克服できぬものではない。 (ベルグソンはこのように国際連盟の出発に結果的に見れば過大ともいえる期待を寄せて、これに国際知的協力委員会議長という重要な役割を持って参加した。しかし、この著が書かれてまもなく国際連盟は実質的に瓦解する悲劇を迎える。

それを見通すように彼は別な観点から未来への展望論をすすめる。次のような楽観的 とも、またベルグソンの祈りの言葉とも見える、つぎのような言葉から始まるのが終 わりの部分である。)

「さて、われわれのたどらねばならぬ道を短縮することは出来まいか。いな、障害を 一つ一つ始末するかわりに、困難という困難を一挙に除去することすることすら多分 可能なのではあるまいか。」

#### B) 快楽を求める道 簡素禁欲の道

今日、人類の主要な関心事となったのは、享楽、贅沢への願いである。この願いが 産業主義と発明精神を発達させた。逆にこの産業主義と発明が享楽、贅沢をそそのか し、このサイクルが狂乱の状態になっている。しかしこの狂乱が我々の目を開かせて くれるのだ。

人類はこの狂乱に先立って、実は今ひとつ別の狂乱があった。中世ではその全期間を通じて禁欲の理想が断然支配していたのである。現在のように万人がこぞって物質生活の向上を切望するようになったのは十五世紀ないし十六世紀以降のことにすぎない。

物欲と禁欲の二つの流れは、元は単一の傾向として相い補って共存していたのが、一つの方向だけが分離して動き出せば、振り子運動が止まらないように行き着くところまで行ってしまう。そして振り子はもどりはじめる。今の物欲狂乱が限界に来ていること、そして質素な生活への復帰に戻り始めるところに達しているというのは様々な点でそのきざしが出始めているのだ。

ベルグソンは、ここでそのきざしとして上げていることは、「食の贅沢が体に危険であること」を科学が警告し始めていること、「セックスを享楽」とすることは婦人の力の向上で是正されるであろうこと、また「贅沢品も全て飽きられて」その輝きを失う運命にあることなどである。

現代ならば、「地球資源の枯渇」、「地球環境の破壊」、「金融システムの崩壊」などの さらに決定的なきざしを上げることができるだろうが、ベルグソンの時代にはまだ見 えていなかった。

#### C) 巨大な体となった人類

科学と技術、発明精神は共に歩むものだから、科学の永遠の進歩にあわせて技術発明が止むことはなく、それとともに人間の欲求も限りなく膨らむであろうというのは誤りである。確かに科学は自分の法則に従って探求をやめることはない。しかし技術・発明は、人為的な方向づけによって進んでいる。元来技術・発明精神は、神的達観思想とともに生まれた民主主義への熱望と出発点では同じであった。不足していた物質生活の充足が万人のものとして望まれていた。しかし産業主義は、万人のものへの方向には発明精神を導かず、なくても済む潤沢へ、一部の奢侈へと走った。都会への傾斜、農村の疲弊、一部の贅沢と食うや食わずの圧倒的多数の人間を生み出した。

とはいえ、今日の機械化の達成による物質上の成功は、かってない水準に達し、人間は巨大な体を得たのである。その力にふさわしい精神的エネルギーを人類が持つとき、人類はいわば新しい種、というより、さらに言えば、動物種としての存在から開放されることになろう。その物質的基礎を人類は充分得たのであるから。

#### D) 精神の科学が未知の世界を開く、

その引き金を引くのは新しい精神科学であろう。物理・化学は、物質の探求で奥深い成功を収めつつあるが、その手法では人間の精神の探求は行えない。それにもかかわらず、精神世界の探求を非科学的と決め付け、学問の世界から排除している。そのため例えばテレパシー現象など、多くの実証的データがあるにもかかわらず、あたまから疑いの目で見られ、研究は進まない。それでも勇気ある人々によって、精神科学は端緒につき、この知られざる大陸のほんの一部をうかがえるようになった。「この未知の世界からの微光がわれわれへまで届いて、この肉の目にも見えたとしよう。そうなれば、ただ目に見え、手で触れるもののみを、存在するものと考え習わしてきた人類に起きる変化は、いかばかりであろう。」

大部分の人にあって素朴に信じられている死後のいのちについての漠然とした思いが、この精神科学の新たな発見によって人々の確信となりさえすれば、人間は今のような快楽にかじりつくことはないだろう。

神的達観が世の中に広がっていくときの生の単純さこそは、真に歓喜である。その喜びの前に快楽は、旭日にてらされた電球の光にも似て色あせたものとなる。

人類はいま自らの成し遂げた進歩の重圧に打ちひしがれている。しかも人類の将来が 一にかかって人類自身にゆだてられていることを、充分自覚していない。

人類は今後共生き続けていく意志があるのか、ただ生きていくというだけでいいのか。

動物種から、飛躍した新たな精神的いのちの種を開花させる努力を、宇宙の滔々たるいのちの先端にあるものの責任として、惜しむ事なくする意志があるのか、「それを問うのもほかならぬ人類の責任なのである。」

このような印象的でせっぱつまった人間への励ましの言葉で二源泉は締めくくられる のである。

## 11、ベルグソン亡き後の世界の思想展開

人類全体に祈る遺言のような言葉を残して、「二源泉」の著作は終わった。

「二源泉」が人類に残したメッセージから三つのキーワードが抽出できる。それがベルグソンン亡き後、人間はどのように引き継ぎ発展させたかを最後にざっと見ていこう。

その3つとは(1)社会のあり方としての「開かれた社会」という概念であり、(2)「贅沢から簡素への反転」の時期であり、(3)「精神科学、特に死後の存続の科学の発展」であろう。

#### A) 開かれた社会 カールポッパーとジョージソロス

「開かれた社会へ」が人類社会が目指す方向だと述べたのは、ベルグソンの「二源 泉」が最初だった。しかし世間は「開かれた社会」を提唱したのは、哲学者カール・ ライムント・ポパーだと承知している人が多い。

カール・ポパーはウイーンのユダヤ人として 1902 年に生まれた。ベルグソンの一世 代下であるが、ナチスの迫害という点では共通する境遇であった。ナチスドイツによ るのオーストリア併合で、海を渡りオーストラリアに移住した。マルクス主義と、ナ チスの全体主義に反対する論考をまとめて『開かれた社会とその敵』を書いた。ギリ シャ哲学から始め西欧の社会思想を常に「開かれた社会」の敵か味方かの二つの陣営 に分けることができると説いた。

彼自身は当初この著作を「一般人のための社会哲学」(A Social Philosophy for Everyman)と題したが、査読と出版への橋渡しをした学者仲間によって『開かれた社会とその敵』 The open society and its enemies)と表題を変えられて出版された。名づけた研究者仲間がベルグソンの「開かれた社会」の概念を知っていて、この本にふさわしいと考えたのかもしれない。

第二次大戦後も冷戦となって、資本主義国と共産主義国との対決は続いたため、こ

の本は自由主義国の哲学的バックボーンとされて、世界に大きな影響力を持った。今では「開かれた社会」の概念そのものの提唱者はカール・ホッパーと考えている人が 多いのはそのためである。

そもそもがマルクスの歴史観に反対する意図を持っていたので、開かれた社会の考えも哲学思想として述べられ比較されているだけで、観念的かつ平面的で、ベルグソンの「開かれた社会へ」が持つ人類史的な位置づけはなく、政治哲学の範囲に矮小化されてはいる。

投機と資産運用によって巨万の富を築いたジョージ・ソロスは、カール・ホッパーの「開かれた社会」に共鳴して、自ら著書「グローバル資本主義の危機―「開かれた社会」を求めて」を書き、資本主義の限界を訴えた。それを社会貢献に活かそうと財団を作り「開かれた社会財団 Open Society Foundations」と名づけた。ソ連の崩壊で中欧諸国が離れていったとき、独立運動に巨額の資金援助をした。またアメリカ国内でもジョージ・ブッシュの再選反対、民主党支援にも資金をつぎ込んだ。それなりに、「開かれた社会」という漠然とした思想普及には貢献しているとみるべきか。

#### B) 質素な生活にもどる

ベルグソンが言うように世界の振り子が、贅沢から禁欲へと振れるのだろうか。 確かに 20 世紀半ばまでの人類は戦争の破壊から来た窮乏から脱するまでは豊かさを なりふり構わず求めてきたのが、地球環境汚染がはっきりしてきた現在、否応なしに まず芸術、文芸、歌の歌詞などから質素さを称揚する向きに変わってきたことは事実 である。

またそのことを明確に主張する論調も数多く出るようになった。例えば 2013 年 7 月号の雑誌「世界」に掲載されたフランス人学者セルジュ・ラトウーシュ「豊かな社会の欺瞞から簡素な豊かさという逆説へ」という論文をみてみよう。

『世界は経済成長社会を求めている。成長のための成長が、経済と生活の第一の目標 となっている。消費社会は、成長社会が必然的に行き着く先で、それは三重の際限な さに立脚している。際限のない生産一資源の無際限の採取、際限のない欲求の生産ー 不必要な製品の無際限の生産、そして際限のない廃棄物の無際限の放出だ。

この社会は、消費中毒にかからせる仕組みは、広告宣伝によって、常に欲求不満を起こさせ、NINJA(無収入、無職、無資産)にすら与えるクレジットカード、数年も経たないうちに旧式化して使えなくなるパソコンはじめすべての不耐久?消費財の仕組み、(結果毎年1億5000万台のパソコンが第三世界の投棄場に持ち込まれ、衛生上の

何の規制もなく処分されている。) によって成り立っている。

この物質の過剰消費は人口の大部分を貧困に落とし、経済的に優位の人々にも真の安心安定は与えなくなっている。人類の未来は成長社会には見えない。これからの脱却が必要だ。人間のあたまが成長社会で洗脳され、植民地化されているので、それから脱却することがカギとなる。」

と語っている。ベルグソンの予言は、100年たって 実際の潮流となりつつある。

## C) ダークマターと五次元の発見と新しい 精神科学への道

ベルグソンは「この未知の世界からの微光がわれわれへまで届いて、この肉の目にも見えたとしよう。そうなれば、ただ目に見え、手で触れるもののみを、存在するものと考えならわしてきた人類に起きる変化は、いかばかりであろう。」と述べた。それから50年、宇宙には見えない物質ダークマター・ダークエネルギーが、見えるものの25倍もあることが確かめられた。 また素粒子理論の先に生まれた超ひも理論から展開された余剰次元の解析から、リサ・ランドール(ハーバード・プリンストン両大学物理学終身教授)は、この宇宙が四次元でなく五次元であることを立論した。目に見えない五番目の次元は重力をつたえるグラビトンだけが存在する。つまり五次元の世界は未だ発見されない重力子重力



波が自由に飛びまわる世界だ。ダークマターダークエネルギーが関与することを予想させる。光を含めた電磁支配のすべての物質は、我々が見ることのできる四次元のブレーン内に閉じ込められているというのだ。現代の科学はこの閉じ込められた四次元の世界しか扱えないために、これらが見えないのだ。人間の精神が解剖しても見えないということや、また肉体は拘束される重力世界のなかで、精神だけは、いつでも時

間空間を自由に飛び回れるということから、それが四次元ブレーン内のものではないことを強く示唆している。そうだとすれば五次元の世界の存在であるかもしれない人間の精神は、肉体の死後のあり方も含めて、この五次元新科学が生まれでる時には、解き明かされることになる。非難と無視にさらされてきたベルグソンの予言は、ここでも勝利への道筋が見えてきたのである。

#### 9) エピローグ

ベルグソンは、振り返ってみれば、彼が二源泉ではじめてそれと発見した「1000 年に一人の神的達観者」の一人であった。しかもこれまで歴史で現れたこの種の偉大な人間と違ったことは哲学者であったことだ。その神的達観を磨き抜いた言葉で表現してくれたのである。我々にその達観は直接伝わるのである。

人類はここにとどまるな、とどまると破滅の道をたどる。宇宙を貫く進化の本道に 戻り、動物種から抜けてはじめての新しい人間種への道を歩め。

この驚くべきメッセージこそベルグソンの得た神的達観なのだ。

彼はイエスを人類が得た最高の神的達観者として見た。(その経過は二源泉に詳しく書かれているのだが、私はそれをあえてこのリポートでは省略した。)そして当然の帰結としてイエスの行列のもとに加わる決心をしたのだ。しかし時代の要請は過酷なものであった。ベルグソンはナチスのユダヤ人迫害に怒り、16年に及ぶリューマチのため体も自由にならなかったにも関わらず、寝巻きとスリッパという姿で出かけ、ユダヤ人登録の手続きを済ませ、迫害されている人々への連帯を大衆の目の前で行動によって示したのだ。生前はユダヤ教徒であり続けたのである。

その葬儀は大哲学者ノーベル賞受賞者としては、およそふさわしくない簡素なものだった。冒頭に引用した弟子で終生の友人であったジャック・シュバリエも葬儀に参加することは阻止された。彼はこう記している。「一九三七年二月八日付の遺言で、ベルクソンは、ベルクソン自身の表現によれば、省察によってますますカトリック教に近づき、カトリック教においてユダヤ教の完成成就を見ながらも、あす迫害されるかもしれぬ人々と共にありたいと欲したが、「もし、パリの大司教の許可があれば、」カトリックの司祭が葬儀の際、祈祷をあげに来てくれるようにという願望を表明していた。私が、スアール枢機卿に、卿の死の直前に会ったとき、枢機卿は、ベルクソンが「願望の洗礼」を受けたものと考えると宣言されたので、ベルクソンの願望は実際に叶えられた。」

#### 10) 謝辞

私の終生の老師加藤先生は 2012 年亡くなられた。先生から「野口君、ベルグソンを 読み給え。図書館にいけば全集がある。その 4 巻と 6 巻を読め。」と電話で言われたの は 2003 年のことであった。(4 巻が創造的進化 6 巻が二源泉である。)当時先生が 89 歳、私も 70 に近かった時であった。今回やっと二源泉がみなさんに紹介できるように なるには 10 年かかった。もう先生には報告できないのが残念であるが、ベルグソンを 教えていただいたことを人生の宝物と思っている。

思えばベルグソン紹介の第1回として『笑いについて』を2004年に発表して、第2回の予定では、この二源泉を取り上げようとしていた。ベルグソンの代表作と聞いていたので2番目に取り上げようとしたのだった。2005年のことだったが、通読してその思想は意外にわかりやすく理解できたと思った。

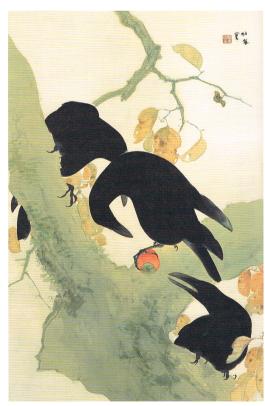
しかしベルグソンを理解するためにはその前に触れておかなければならない手順が

あったことに気づいた。

2007年に『ベルグソンのいのちの理論:創造的進化エランヴィタール』を、そして2010年『ベルグソンの精神についての哲学「物質と記憶」を読む』を先行した。

2009年の『現代物理学と新しい哲学』を取りまとめたのはベルグソン哲学の科学的バックグラウンドを確認する意味合いがあった。また 2012年の『無について』はベルグソン以降の哲学の調査であった。

これらを先行したことはベルグソンの遺作となった『二源泉』を理解するためには必要な回り道であった。ベルグソンが、最後に著したこの「道徳と宗教の二源泉」こそ、人類に残した現代の福音であると確信している。



#### 追補1

飾った日本画は竹内栖鳳作である。竹内栖鳳は 1864 年(元治元年)の生まれで、ベルグソンと同世代(正確には 5 歳下)である。亡くなったのも昭和 16 年のベルグソン昭和 17 年の栖鳳とほとんど同じだ。だから作品の制作年とベルグソンの経歴が対応できる。表紙絵の「しぐるる池」は 1941 年の作でベルグソンのなくなった年、栖鳳もその翌年なくなっている。十五頁の「瀑布」は 1932 年二源泉の刊行の年に書かれた。

「群鴉」は1921年の作で、この翌年は国際連盟の国際知的協力委員に推挙された。群鴉がもっている柿が印象深いが、我が老師加藤先生が亡くなられた前年、先生の故郷の豊橋からどっさりと送っていただいた柿を思い出して掲げた。

新渡戸稲造(1862—1933)も同時代人だ。国際連盟事務次長(1920~1926)を務めたとき、ベルグソンと出会っている。新渡戸は「太平洋の架け橋」でこう書いている。「知的協力国際委員会で知り合ったアンリ・ベルグソンが説いた閉じた社会と開いた社会が実に面白いし、理解できた。閉じた社会と開いた社会は、個人の心、考え方が源となって、組織、社会、国家の思想を左右する。」

#### 追補2、

今回の紹介リポートは、彼のメッセージが簡明に読んでくださる方に届くように、思い切った圧縮をしてある。ギリシャの哲人、釈迦の仏教、キリスト教の神秘家などを比較したところなどを切り捨てるなどである。それでもベルグソンの言いたかったことは届いていると思っている。しかし改めて原著をお読みになる方のために、このリポートの章節と原著の章節の対応表を上げておく。